

日本ラテンアメリカ学会 会 報

No. 14

1984年1月10日

第14号 目 次

- 1 第18回理事会報告
- 2 学術・文化情報
- 3 会員活動報告
- 4 近着の会員業績
- 5 計 報
- 6 事務局から
 - ラテンアメリカ研究センターめぐり
 - 海外ラテンアメリカ研究センター紹介

1 第18回理事会報告

1983年11月12日(土) 13:30~
15:30 於東京・東京大学教養学部, 出席
理事4名(委任状4通)

○報告事項

i) 会報13号を編集・印刷・発送した。付録の会員業績目録は印刷が間にあわず, 14号とともに発送する予定である。14号の編集は進行中である。

ii) 定例研究会 東日本部会は11月5日上智大学において第7回研究会を, 西日本部会は10月1日神戸外国語大学において第10回研究会をおのおの開催した。

iii) 年報4号の編集 編集委員会は11月12日午前中に第三回会合を開催し, 応募原稿6篇の審査委員を決め, 依頼原稿(論文4ないし5篇, 書評4篇, カレント・フィールド・リサーチ・レポート約8篇)の依頼方を確定した。

iv) 正会員宮出秀雄氏・準会員齋藤広志氏が逝去された。

○審議事項

i) 正会員5名の入会を承認した。この結果正会員数は246名となった。

ii) 第5回定期大会 前回理事会で組織委員長に松下洋理事を任命したが, 今回これに加

えて原田金一郎理事を組織委員に任命し, 両理事に, 他に数名を名古屋地区在住会員の中から選任することを委嘱した。1月1日発行の会報14号と一緒に葉書を送って報告, 希望を募ること, シンポジウムの準備時期を早めること等を申し送ることを決定した。

2 学術・文化情報

i) 第20回ラテン・アメリカ政経学会年次大会が10月8日(土), 9日(日)の両日にわたり天理大学において開催され, 以下の研究発表が行われた(出席者30名)。

10月8日(土)

- 「ドミニカ憲法史研究について——ラテンアメリカ比較憲法論序説——」 原田金一郎(大阪経済法科大学)

10月9日(日)

- 「明治期植民思想とラ米——榎本武揚と

日本学術会議第13期会員選挙の中止について

日本学術会議中央選挙管理委員会委員長通知(総学選第48号, 昨年12月1日付)が参りましたので概略をお伝えいたします。

昨年11月28日, 「日本学術会議法の一部を改正する法律」が第100国会において成立したので, 同日をもって学術会議は第13回選挙を中止した。投票用紙・選挙公報等の発送もまたとりやめた。

今回の法改正により, 学術会議会員の選出方法が, 従来の「選挙制度」から「学術研究団体からの推薦制度」に改められることになった。また, 現在の(第12期)会員の任期は, 「昭和59年1月20日から起算して1年6カ月を越えない範囲内で政令で定める日の前日」まで延長されることになった。

東京大学教養学部中南米分科 同 大学院総合文化研究科

東京大学におけるラテンアメリカ研究は、長い間文化人類学大学院及び国際関係論大学院に所属する教官と大学院生の一部によって担われてきた。特に考古学・民族学の分野で優れた業績を残してきたことは特記に値する。

他方1980年4月に、教養学部教養学科の12番目の分科として「中南米分科」が発足し、更に1983年4月からは、中南米研究コースを含む総合文化研究科地域文化研究専門課程がスタートするに及び、ラテンアメリカ地域に関する教育・研究体制が一気に整うことになった。

教養学部に残った3、4年生を対象とする教養学科中南米分科は研究機関ではないが、将来実社会に旅立つ人々だけでなく、研究者の道を志す人々をも訓練すべく、(1)学際的であると同時にいずれか一つの学問分野のディシプリンをしっかりと身につけること、(2)現地体験や現地からの来訪者との交歓などの課外活動も重視することを指導理念として掲げている。

中南米分科が実際に学生の受け入れを始めたのは1982年4月からであるが、現在82年度進学者2名、83年度進学者7名、84年度進学内定者3名、外国人研究生1名を抱えている。学生の関心の対象は、文学、中米の政治、地域経済統合など多岐にわたり、特定の傾向は今の所見られない。また卒業後の進路も、まだ一人も卒業生を出していないために不明である。

今年の4月発足した大学院地域文化研究専門課程には、ラテンアメリカ文学を専攻する学生一人が在籍する。また社会学研究科の国

際関係論専門課程及び文化人類学専門課程と法学政治学研究科にも、それぞれの専門分野の立場からラテンアメリカ研究を志す若い研究者が育ちつつある。

教養学科中南米分科では、原則として月一回「中南米コロキウム」を開催しているが、ここには学生・大学院生・スタッフが集まって、現地からの来訪者や帰国者の話を聞く。

専任スタッフは、外国語科スペイン語教室の増田義郎教授(民族学)、社会科学科政治学教室の恒川恵市助教(比較政治学)、人文科学科歴史学教室の高橋均助手(植民地時代史)と、専任外国人教師1名(文学)というように、文字通り学際的構成をとっている。その他に講師として、本学会員をはじめとする各方面の方々の多大なる協力をあおんでいる。

中南米分科スタッフの研究対象地域は、これまでの研究歴を反映して、主として核アンデス(特にペルー)とメキシコである。現在ペルー南部における山地住民の山地・海岸間移動の意味について、学際的な共同研究を組織しようと準備している。

中南米分科独自の刊行物は今の所ないが、教養学科の紀要に中南米分科スタッフの論文が載ることはある。

なお蛇足ではあるが、本学会が1980年6月に発足して以来、その事務局が中南米分科内に置かれている。ただ会報・年報の発行日が近づいてきたり、定期大会が目前に迫ったりすると、学会の事務局が中南米分科の中にあるのか、中南米分科が学会事務局の中にあるのか、わからなくなることがある。

(文責 恒川恵市)

横山源之介—— 吉田秀穂（アジア経済研究所） ○「高度成長期以降のブラジル経済の回顧」 西島章次（神戸大学）

○「アルゼンチンの思想家 J. B. アルベルディの経済開発理念」 今井圭子（アジア経済研究所） ○「ポンバル時代のアマゾン地方開発戦略について」 住田育法（京都外国語大学）

（ラテン・アメリカ政経学会についてのお問い合わせは、神奈川大学外国語研究センター内まで）。

ii) ラテンアメリカ原住民問題研究会

1982年の夏、上谷博（天理大）、大垣貴志郎（京都外大）両氏の発意によって、関西在住者を中心にしたラテンアメリカの原住民にかんする研究会が発足した。

当初は両氏のほか、住田育法氏（京都外大）と神代修（同志社大）の4名で開始されたこの研究会には、その後大井邦明（平安博物館）、小林致広（神戸外大）、高林則明（京都外大）、辻豊治（京都外大）、林美智代（関西外大）、松久玲子、真鍋周三（青学大大学院）の各氏が加わり、現在11名で定期的に研究会が開かれている。会員外にも門戸が開かれているし、いままで何名かの研究者が随時参加したこともある。

参加メンバーの専門がそれぞれ異なっているので、いきおい研究領域も政治学、経済学、歴史学、教育学、考古学、文学の多岐にわたっており、いままでのところラテンアメリカの原住民問題がちがった視点から多角的に照射されるといった結果が生まれている。

こうした学際的研究方法がよいかどうか、それについては今後客観的な判断をまたねばならないが、少なくともいままでのところ研究会は支障なく進捗し、専門分野の相違がかえって発表者の今後の研究の進め方に示唆を与えたり、研究の内容を補完させたりするプラス効果も生まれている。現在までの研究発表は次のとおりである。

第1回（1982年7月16日） 神代「カリブ海域の原住民社会——キューバを中心に——」

第2回（9月11日） 住田「現代ブラジルの原住民問題」

第3回（11月20日） 辻「ペルーにお

けるトゥパック・ユアマル反乱の歴史的背景」

第4回（1983年1月29日） 林「メキシコにおける原住民とその労働形態の変化」

第5回（3月26日） 小林「マヤ叛乱について」

第6回（5月28日） 真鍋「16世紀ポトシとアルト・ペルーにおけるインディオ共同体の変容——チュクイート地方の場合を中心に——」

第7回（7月16日） 松久「メキシコとペルーにおける二重言語・二重文化教育」

第8回（9月17日） 大井「トルテカとチチメカ——メソアメリカ史再構築のために——」

第9回（12月3日） 上谷「植民地における原住民反乱」

なお研究会の名称「ラテンアメリカ原住民研究会」は、あくまで仮称である。「コロンブス以前」のラテンアメリカの住民とその子孫を原住民と呼ぶべきか、それとも先住民、インディオ、インディヘナ、アボリーヘンと呼ぶべきか、大方のご教示をいただければ幸いである。（神代記）

iii) 筑波大学キリシタン文庫について

3年前筑波大学中央図書館は、フランスの Max Besson による16、17世紀の日欧関係史に関する大型コレクションを購入した。海老沢有道氏の評によれば、「天下の大コレクション」であり、諸大陸が連絡され、世界史が成立した15—17世紀の大航海時代の1側面に関する歴史資料として、ラテン・アメリカ史研究者にも参考となる資料を含んでいる。

内容は、1) キリシタン海外版4点、2) ロヨラおよびザビエル61点、3) 天正遣欧使節19点、4) 日本26聖人殉教記16点、5) 慶長遣欧使節6点、6) 宣教師報告書簡（イエズス会年報、殉教記類）188点、7) 編著類65点、計370点の刊行文献である。刊行年は、1552年から1825年にわたり、使用言語は、日（ローマ字表記）、西、葡、羅、仏、伊、独、蘭、英におよぶ。利用は、原則として、マイクロ・フィルムで行われる。学会事務局に、ゼロックス・コピーによる暫定カタログが一部寄贈されている。

（山田睦男）

海外ラテンアメリカ研究センター紹介 (1)

ウィスコンシン大学(マディソン校)土地所有センター,
同イベロ・アメリカ研究プログラム

石井 章

1) 土地所有センター(Land Tenure Center)は、第三世界の土地制度、農業問題に関する学際的な研究、教育、情報活動を行なうセンターとして1962年に設立された。対象地域はアジア、アフリカ、中東、ラテンアメリカにまたがるが、設立後数年間はラテンアメリカに焦点が絞られていただけにラテンアメリカ研究が最も進んでおり、スタッフにもラテンアメリカニストが多い。27名のスタッフのうちセンター専任は1名だけで、他はいずれも他学部学科の教官を兼ねている。専門分野は法律、政治学、経済学、農業経済学、農村社会学、歴史学、人類学と多様だが、農業経済学関係者が最も多い。ラテンアメリカニストはDirector以下約12名。

センターの活動で特筆すべきことは、数年来US・AID(連邦国際開発庁)との契約に基づいて、AIDの開発援助計画に対するコンサルタント的な調査研究を実施していることである。79/83年に実施中のプロジェクトは「土地、水、自然資源へのアクセス」と題され、発展途上国の農村貧困層を対象とした開発援助計画を側面から支えるものである。対象国の中にはホンデュラス、エルサルバドル、ニカラグア、コスタリカ、バルバドス、エクアドル、ペルー、パラグアイの各国が含まれている。

出版物はLTC News Letter(季刊)の他、Research Papers(76点^{*})、LTC Papers(123点^{*})、LTC Reprints(雑誌論文のリプリント 138点^{*})、Training and Methods(29点^{*})(*いずれも82年12月現在)の各シリーズ。それに若干のモノグラフとビデオグラフィがある。

センターの図書館は大学のSteenbock記念図書館4階の一隅を占め、図書13,000冊、パンフレット類および未刊行の調査レポート等17,000点を有し、雑誌400種を受入れている。

教育機関としては、Development StudiesというPh. Dコースがセンターに設けられている。学生は途上国からの留学生が多数を占める。

2) イベロ・アメリカ研究プログラム(Ibero-American Studies Program)は、同学最初の学際的な地域研究プログラムとして1930年に設立されたHispanic Studiesがその

前身である。教育機関としては学部2コース、MA、Ph. D各1コースが設けられている。専任スタッフはDirector 1名のみであるが、約60名の教官が教育に携っている。関連する学部学科はアフロ・アメリカ研究、法律、歴史、政治学、経済学、農業経済学、経営学、社会学、農村社会学、人類学、地理学、植物学、教育学、比較文学、女性学、マスコミ論、中世研究、医学史、音楽、スペイン語、ポルトガル語と多岐に及ぶ。最近ではケチュア語の教育も加えられた。

当プログラム独自の図書館はないが、大学の中央図書館(Memorial Library)内にラテンアメリカ関係のコーナーがあり、専門の司書がいる。これは米国でも有数のラテンアメリカ・コレクションの一つであり、なかでも歴史、経済、スペインおよびスペイン系アメリカ文学、ポルトガルおよびブラジル文学が重きをなしている。

当プログラムでは雑誌Luso-Brazilian Reviewを刊行している。この他プログラムが主催あるいは共催する講演会、公開講座、シンポジウム、音楽会、ドキュメンタリー・フィルムの上映等が随時行なわれている。たとえば筆者が滞在した83年の春期には、現代ペルーの政治経済状況に関するパネル・ディスカッション(IEPのJulio Cotler教授、カトリック大学のJavier Iguñiz教授他がパネリストとして参加)、ニカラグア北部の紛争地帯のドキュメンタリー・フィルムの上映、ボリビアの民族音楽団の公演等が行なわれた。

以上2機関の連絡先は以下のとおりである。

- 1) Marion R. Brown, Director
Land Tenure Center
First Floor, West Wing, 1300
University Avenue
University of Wisconsin-Madi-
son, WI 53706, USA
TEL. (608) 262-3657
- 2) Thomas E. Skidmore, Director
Ibero-American Studies Program
1470 Van Hise Hall, 1220 Linden
Drive
University of Wisconsin-Madi-
son, WI 53706, USA
TEL. (608) 262-2811

IV) 京都外国語大学メキシコ研究センターにおける最近の活動

本センターは在京都市メキシコ名誉領事館に併設される形で1980年に発足した。最近の主な活動は、各種の講演会、展示会の開催（最近では『ゴメス・デル・パヤン風景画展』、メキシコ、ペルーを中心とした図書資料の収集、所報『メキシコ研究センター通信』の発行などである。また、マヤ・アステカ関係のレプリカ約50点を所蔵し、外部の展覧会などに貸出している。『メキシコ研究センター通信』は、現在まで第2号を発行し、関係機関および関西在住のLA研究者に無料配布している。記事は学内の催し、メキシコ関係のニュースを中心にしているが、今後、書評や新刊紹介、統計資料などを掲載し、関西におけるラテンアメリカ研究活動の動向をカバーできるような内容にしていきたい。（『メキシコ研究センター通信』は年2回発行、御希望の方は、京都外国語大学メキシコ研究センターまで、〒615京都市右京区西院笠目町6、☎075(312)3388）〔文責 辻豊治〕

V) 国際交流

筑波大学歴史人類学系にメキシコ市第3世界研究所(Centro de Estudios Económicos y Sociales del Tercer Mundo)の研究員、María Cristina Barrón Soto氏が私費外国人研究員として、本年11月から来年9月まで滞在し、「キリシタン文庫」により日墨フィリピン関係、日本におけるキリスト教の受容などを研究している。同氏は、フィリピンに留学し、メキシコのアジア、アフリカ研究学会の事務局長を勤めた。（山田陸男）

3. 会員活動報告

i) 定例研究会

東日本部会第7回定例研究会は、1983年11月5日(土)午後2時から上智大学6号館で開催された。今回はラテンアメリカの現代文化の動向について、以下の二つの発表がおこなわれた。興味深いテーマなので、熱の入った研究会となった(出席者25名)。

報告1. 「壁画運動以後のラテンアメリカ美術」 加藤薫(国際基督教大学)

2. 「ブーム以後のラテンアメリカ小説」 野谷文昭(津田塾大学)

加藤報告要旨

50年代以降のラテンアメリカ現代美術で提起されてきている問題の多くは、20年代に始まる壁画運動から継承されているものである。壁画運動の評価を要約すれば、1) 社会主義革命の芸術、2) 壁画形式の復活、3) 作家の個人表現から大衆の共同表現となる作品の創造、4) 反モデルニスモ志向、5) 新技法と新素材の開発、という点にあり、物語性のある主題を具象モチーフで表現した。

「革命の芸術」という点は革命後のキューバ・ポスター芸術に色濃く反映され、表現の質も高い。モダニズム絵画におけるイメージ性の追求はシュールレアリスムを経てR・マッタのrealista del surの概念でアメリカ化される。土着感性の復権はハイチに代表される素朴画や民芸の中に見出せる。大衆性はネオ・リアリスタの主題性に負うものから最近では都市の複製イメージを追うポップ絵画に継承されているし、新技法や新素材は「熱い」抽象表現主義者達によって実験が試みられている。

一方、西欧現代美術をラミに定着化させようというT・ガルシア等の国際主義的運動は、はからずも西欧美学の限界を感じさせるものであった。また壁画という形式のみに準拠した作品群は装飾モニュメント以上のものではなくなっている。

反近代美術の先鋒として今日のラミ現代美術に求められる革新性とは、ブラジリアのような失敗を恐れず西欧現代美術を消化しながら、かつて絵画の物語性を獲得するため到達した20年代の壁画のようなラミ文化とのアイデンティティーを持った表現形式を見出すことであろう。

ii) 第11回LASA国際会議に参加して

グスタボ・アンドラーデ

第11回LASA国際会議は、1983年9月29日から10月1日までメキシコ市で開催された。会議の概要を限られたスペースで語るのは困難である、と言える程に参加者数も研究会数も、ひじょうに多い会合であった。入手できた資料によれば、参加者、オブザーバーの総数は3000人近く、またプログラムに記載され

たパネルディスカッションや円卓会議などは558件を数えた。中には準備不足で配布されない資料もあったようである。事前に発行されたプログラムは148ページもあった。これだけ述べただけでも会合の準備・運営にあたっては、その後方業務がいかに大変であったか想像できよう。

L A S A 国際会議が米国以外の国で開催されたのは、今回が初であった。これはLASAの発展史上ひじょうに重要なことである。また、スペイン語と英語が公式の言語としてパネルディスカッション、円卓会議に使用され、「米国とラテンアメリカにおける学界相互の意志疎通は、今まで以上に円滑になった」と語るメキシコの参加者もいた。

会場では、米国、ラテンアメリカ以外の代表者の姿も少なくなかった。私自身も中国の新聞記者と話をしたのを覚えている。また、「サリー」で正装したインド代表の姿もよく見かけた。日本人では大学教授10名の他に、現在メキシコで勉学中の大学院生数名が参加していた。多くの国から参加者のあったこの会議は、差詰めラテンアメリカ研究者による小さなオリンピックといったところであった。しかし、ソ連のラテンアメリカ専門家は、ソ連とラテンアメリカというパネルディスカッションがプログラムに組まれていたにもかかわらず、最後まで姿を見せなかった。

パネルディスカッションの参加希望者は、事前に自分の出席する会を上手に選択しておかなければならなかった。というのは、ホテルフィエスタの収容能力は十分でなく、時々近くのホテル・レフォルマか、タクシーで10分の鉱業会館へ移動しなければならなかったからである。参加者は皆あちこちと会場を忙しく往復することが多く、他の研究者と語り合う時間が大幅に制約されてしまった。

L A S A 国際会議で行なわれた全ての研究会に等しく学問的価値があると言ったら、それは間違いであろう。現代の諸問題を取り扱った円卓会議の中には、現状を深く研究するというよりは、むしろプロパガンダに終始した会合もあったように見うけられるからである。ニカラグア、キューバ両政府の公式代表は、国際的な場を利用して自らの立場を守ろうとした、と言われても仕方あるまい。かつ

てある研究者が私に、学問と政治の混在は以前からL A S A の会合の特徴である、と語ったことがあったが、私はそれを思い出した。こうした傾向は、ラテンアメリカの学究の一部と、米国の左翼的な学究の中に見うけられる。ニカラグアをはじめラテンアメリカ諸国の映画も上映されたが、こうした場所においては、他のパネルディスカッションで抽象的に討議される事柄が映像として視覚化されてしまった。

私は自分の学問的興味から、コロンビアに關係のあるセッション、米国とラテンアメリカの關係を取り扱ったセッション、そしてラテンアメリカと教会の役割についてのセッションに出席した。コロンビアの専門家とコンタクトがとれたのはひじょうに良かった。なぜなら、ワシントンのジョン・ホプキンス大学でコロンビアのベタンクール政権の現状に関する会合が行われるだろうということを、私はそこで知ったからである。日本からの参加者は、それぞれ自分の専門とする研究会に出席したと思う。だからL A S A 国際会議とは言え、その印象には個人差があろう。テーマについて一言申し添えると、地域的に見た場合、当然メキシコ關係が特別多く、558件中105もあった。その他比較的多かった地域は、ブラジル50件、中米32件、ニカラグア、パナマ、グアテマラが合計して9件、アルゼンチン、ペルーがそれぞれ18件ずつであった。これらのデータからもわかるように、L A S A が關心を持つ地域は、日本ラテンアメリカ学会のそれと大差ないようである。

4. 近着の会員業績

(1983年9月から11月までの到着分)
*今後、本欄掲載をもって従来の受領通知葉書に代えさせていただきます。

[籍]石井章編『ラテンアメリカの土地制度と農業構造』(アジア経済研究所, 1983年1月) B5判278頁価2,800円 執筆者石井章(メキシコ全般)・国本伊代(メキシコ・モレロス州)・畑恵子(メキシコ・ベラクルス州)・辻豊治(ペルー)・西川大二郎(ブラジル)・今井圭子(アルゼンチン)

〔誌〕『イペロアメリカ研究』5巻2号通巻9号(上智大学イペロアメリカ研究所, 1983年7月) 執筆者: 小林利郎・二村久則・木村栄一・加藤隆浩・堀坂浩太郎

〔複〕海老沢有道監修『16~18世紀刊行キリシタン関係書籍コレクション目録: ベッソン氏コレクション』発行者発行年記載せず。44頁A4判製本ずみ。同コレクションは筑波大学所蔵。359点377冊, パリ在住のMax Besson氏の蒐集したもの。目録は7項目に分類, いくつかの書目に短い解説を付す。

〔冊〕『資料ラテンアメリカ』(資料ラテンアメリカ刊行会) 連絡先☎631奈良市宝来町1320 奈良大学気付青木芳夫

○3号 合州国労働市場における不法在留外国人の特徴と役割——試論的研究——(デビッド・S・ノース, マリオン・F・ヒュースタウン共著) 1983年2月 別冊統計付録付。12+27頁。

○4号 メキシコ革命に関する省察(エンリケ・セーモ著) 1983年8月。11頁。

〔複〕辻豊治, 19世紀ペルーの従属的發展——中心—周辺内部構造の形成『歴史学研究』別冊特集1983年度歴史学研究会大会報告(青木書店, 1983年11月) 「近現代史合同部会I」への報告。他の二報告と討論要旨を付す。

〔抜〕原田金一郎訳, テオトニオ・ドス・サントス著ラテンアメリカにおける変革の類型と階級および社会勢力『経済学論集』7巻4号(大阪経済法科大学, 1983年3月) 『帝国主義と従属』(柘植書房刊)の訳出時割愛部分の一部。

〔誌〕『メキシコ研究センター通信』2号(京都外国語大学メキシコ研究センター, 1983年11月) B5判6頁 内容: 講演筆記・書評・学内だより・学術情報(ラテンアメリカ原住民間問題研究会)・メキシコだより等 年2回刊。

〔冊〕Catalogo de Publicaciones, (Centro Amazónico de Antropología y Aplicación Práctica) Apartado 111-66, Lima 14, Perú

〔誌〕CLASicos, A Newsletter on Latin American Studies, 12(1983) Univ. of Pittsburgh, Center for

Latin American Studies, 4E04 Forbes Quadrangle, Pittsburgh, Pennsylvania 15260

〔誌〕IIAS News, 1:1(Institute of Inter-American Studies, Graduate School of International Studies, University of Miami, Fall 1983) P. O. Box 248123, Coral Gables, Florida 33124 8p.

〔冊〕Mesa-Lago, Carmelo, Latin American Studies in Asia, (Univ. of Pittsburgh, Center for Latin American Studies, 1983) 65p.

〔誌〕Politica, vol. 3 (Instituto de Ciencia Política, Universidad de Chile, 1983) Precios: Para Chile \$550; Para el extranjero US\$7

5. 訃 報

正会員宮出秀雄氏(東海大学政治経済学部教授・農業経済学)が, 昭和58年10月8日午前7時15分, 肺癌のため逝去されました。享年74歳。氏は昭和16年早稲田大学大学院を修了され, 中央大学講師, 富士短期大学教授等を歴任された後, 現職。ブラジルを中心に, 移民史・農業事情等を研究されました。謹んで御冥福をお祈り申し上げます

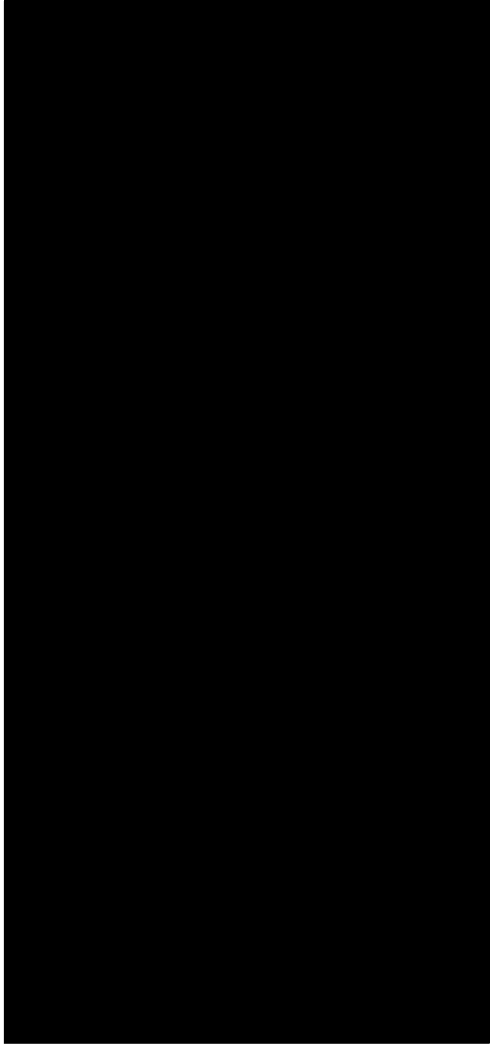
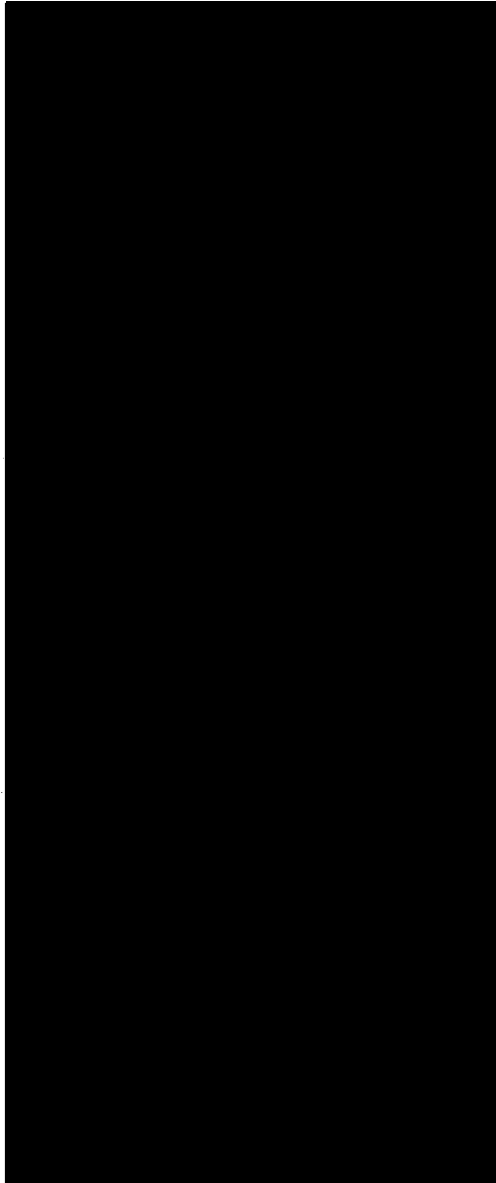
準会員齋藤広志氏(サンパウロ大学コミュニケーション学部教授・社会人類学)が, 昭和58年10月31日午後7時52分(日本時間), 直腸癌のため逝去されました。享年64歳。氏は昭和9年渡伯, 昭和31年サンパウロ社会政治学院卒, 神戸大学助教授等を経て現職。日本移民史料館初代館長。昭和52年「外国人になった日本人」で日本エッセイストクラブ賞を受賞されました。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

1984年度大会について

日本ラテンアメリカ学会第4回大会は、6月9日(土)および10日(日)の2日間にわたって名古屋の南山大学で開催される予定です。シンポジウム、研究報告、記念講演などが計画されております。つきましては、研究報告に関して分科会を編成するために報告希望をとることになりました。同封の葉書に研究報告のテーマをご記入のうえ、1984年2月10日までにご返送ください。

6. 事務局から

i) 新入会員(第18回理事会承認)



No. 14 1984年1月10日発行
日本ラテンアメリカ学会事務局
〒153 東京都目黒区駒場
3-8-1
東京大学教養学部8号館
中南米分科気付
☎03(467)1171
内線579